

敗戦三文オペラ

第二回

私の焼跡放浪記 上野篇・地下道無惨

北国から帰った私は、上野地下道を根城にブーバイ・クーパーの生活を送っていた。

竹中 労

一九四七年・秋

あの暗く無惨な光景に、「焼跡を知らぬ」若者たちは、けつして理会できまい。そう、どう説明したところで、それは最早「伝説の時代」でしかないのだから。

めぐって国会乱闘三日間、片山内閣は社会党左右の分裂に揺れ、2・1ストの敗北で一步後退した日本共産党はといえば、野坂参三のいわゆる平和革命路線で、二歩後退の白旗をかかげたのである。

放浪の旅から学園に戻ったとき、食糧メードーの昂揚は去り、「街頭から革命を!」とウギが流れていた。ヤミ米を買わず、配給の食糧だけの生活を守つて、栄養失調で死んだ裁判官がいたつけ。ソビエトの総天然色映画『石の花』が封切られて、アメリカから大山郁夫が帰ってきた。『炭坑国家管理法案』を

青年共産同盟に属して、引揚学生同盟の一員でもあつた私は、あちらこちらの選挙応援にかり出された。参議院選挙では国民協同党の皮革業者の弁士をつとめ(落選)、区会議員選挙では無所属共産系団体役員の職を持つて歩き(落選)、然りしこうして衆議院選挙は社会党の弁護士の事務所に雇われ(落選)、といつた具合であった。お断わりしておくが無節操に弁当を喰つて歩いたわけではない。それらの候補者はすべて、引揚運動の関係者だつたのである。日当を払つてくれたのは、Fという社会党的弁護士だつた(次の連



今日もにぎわう上野駅

華でめでたく当選した。だが選舉運動に關わったおかげで、私はあの焦土の東京で、タラフク呑み食いしている連中がいることを知つたのだ。

引揚者全国連合会、都連合会などの幹部につられて、『打ちあわせ』と称する会合に何度も顔を出した。はじめて、陶々亭という日比谷の中国料理店に招かれたときの驚愕は、昨日のことのようによみがえる。いまにして思えば、チャーハン、ゴモクメシ、スパタ、レバニライタメの類でしかなかつたが、わが目をうたがう五味八珍、満堂に香りみなぎる料理の数々が山盛りに並べられて、ビールが林

わぬ情景であつたのだが、かの落選候補先生をはじめ、引揚運動の幹部たちはこんなものは食い飽いているとばかりに、泰然自若と度か顔を出した。

立しておつた。それは、この世のこととも思われぬ情景であつたのだが、かの落選候補先生をはじめ、引揚運動の幹部たちはこんなものは食い飽いてとばかりに、泰然自若と席について、着飾つた仲居さんたちに酌をし、てもらつてはいるではないか！

感涙にむせん

食べたアンマン

諸君よ、お嗤い召さるな。私は罪の意識におののきながら、ガツガツむさぼり喰つた。気が遠くなるほど美味かつた。しかも食後にアムマンが出たのだ。熱くてねつとりと甘いほんものの中華饅頭であつた。戦前、たしか昭和十八年だったと思う。『作文館』と名を変えたムーラン・ルージュの帰途、中村屋に行列をして買って帰つてから、絶えて久しいご対面であつた。私は感涙にむせぶ思いで、ゆつくりと、そうご馳走で腹がくちくなつていたせいでもあるが、口にほうりこんだアンマンの一片をまず噛みしめ、舌で餡の部分を甜めまわし嚥下してから、唾液をおもむろに皮の部分にまぶして食道へ送りこむ作業に、

しばしがほどは熱中したのであります。信じられない、中華饅頭なんざそんな美味しいものぢやないって、きっとそういうだらうね。「焼跡を知らない」若者たちは。だが、真にセイを書いておつたが、戦後はじめて食つたカツドンにまさるカツドンに、いまだぐりあつとらんという彼の言たるや眞実である。やつがれ中国料理狂いとなり、ついに大陸に旅してまで、廣東・上海・四川・北京・潮州料理と、ありとあらゆるかの地の菜譜（すなわちメニュー）を試みて、しかも食傷しない理由は、戦後のこの原体験によるのである。クイモノの話はこの位にしておくが、閑話に決してあらず。これより展開する物語りは、かくも人々が餓え渴いておつた、一部の特權階級をのぞいて、日本人の大多数が餓鬼道に墮ちていたのだということを、念頭に置いてもらわないと、それこそ日本むかしばなしに終つてしまふのである。

さようさ、なぜ私は罪の意識を抱いたか、まさに餓えた人々の中にいたからだ。引揚者

仮泊所に寝泊りして、援護活動に私はたずさわっていた。当時の苦惨な体験を『呼び屋』（引文堂・一九六六年刊）という著書、その他に書いているが、実際に目前で衰弱死する人々を見た。餓えのために盗み、身を売り、精神錯乱していく人々を日常に見た。そして餓えが平等ではないことを、資本家とか高級官僚とかいう敵の中にではなく、闇屋ブロー カーでもなく、その餓えた人々の代表とか、味方と称する指導者の中に、文学通り運動を食いものにしているボスがいることを、私は知ってしまった。そのいわばパン屑を喰い、盜泉の水を呑んだ私は、つまり彼らの同類にダ落したのだと思いながら反省をしながら、ひたすら食いたいという願望に、ついに抗しきれなかった。

有難きもの……

自分は乞食のような人間である。まったくもつてどうしようもなく欲望に満ちた。陋劣さもある人間であると思つた。無賴の青春に私を追いかんだのは、「毒喰らわば皿まで」という、汚辱の覚悟であった。私はダ落した。

人々を見た。餓えのために盗み、身を売り、精神錯乱していく人々を日常に見た。そして餓えともいえた、おのれに撃いだ蜘蛛の糸のごとき救いであったとともに。

五月一日、戦後第二回メーデーに参加した

地獄へと堕ちていった。せめて、餓え苦しむ人々の希望の上に、あぐらをかく者ではありたくないという思いだけが、青春の誇りとも甘えともいえた、おのれに撃いだ蜘蛛の糸のごとき救いであったとともに。

魂が凍るほど怒り

私は、「有難きものは社共連立内閣」というプラッカードをかかげて、「不真面目だ」と怒り出した東大細胞の連中と口論になつた。おまけに、アルバイト先のニッカボツカなる社交喫茶を中心労働組合をつくり、W・Uの青旗をお立てる。学生のデモの列に尾いて歩いたのが問題になつた。W・U、すなわちウエイトレス・ユニオンの略号である。新橋社交街に勇名をはせた、林ふで子さんという女傑を委員長にいただいて、一時は組織人員三千をようし猛威をふるつたことだった。

つまらぬことを自慢するようだが、私は戦後ウーマン・リブ、『窮女連合』のオルガナイザーでもあったのである。東大の馬鹿どもは許しがたい誤謬を故意にしてからかい、當時

からエリート左翼の下司な根性がまる出しであつた。日本共産党異端と私がなつたのは、入党してまだ間もない、このころからのことなのである。

引揚運動のダラ幹と同じ退廃を、共産党のオエラガタにも見た。日比谷公会堂の階上にあつた、当時日共きつての理論家といわれた風早八十二の事務所をたずねて、スコッチ・ウイスキーと洋モクの饗應にあづかったのもそのころである。『解放軍規定』でアメリカ占領軍とランデブー中であつた日共幹部は、たとえば徳田書記長の家にいくと、押入れにレーリー（米軍の携帯口糧）がぎっしりと積まれている。などといふ噂が下級の党員の間でもっぱらだつたが、風早事務所の接待はその風説を裏付けたのである。引揚学生同盟対内部長（事務局長）に就任して、特配物資トラック部隊の責任者にまで、私自身もダ落していた。しかし、すくなくともその一部を着服、横流しするという悪デエには染まつてゐなかつた。（反対派によつて彈劾パンフを

当時ばらまかれたが、それは事実を歪曲したものである)

見るもの聞くもの醜悪であり、幻滅以外のナニモノでもなく、夏はすぎて秋となつた。上野の地下道に出入りするようになり、あの無惨な光景を見たのは、九月もそろそろ末のことであつた。

前号でも書いたように、一九四六年五月に上野駅から、私は北海道放浪の旅に出た。そのころ地下道には数千の家なき人々が折り重なつて寝ていた。半年に及んだ北国の漂泊から帰った冬、その情景に変りではなく、御徒町にかけてのガード下に夜の天使たちの姿が増えたのと、飴屋横丁のヤミ市のすさまじい活気が景物をそえていたくらいのことであつたが……

桜の木の下で浮浪児たちに囲まれ、慈愛の手をさしのべているフランガン神父の肖像、およそ百号大のお世辞にも傑作とはいえない油絵が飾られた駅の構内に、引揚学生同盟の上野班詰所が置かれ、そこに度々私は顔を出したり、ときには宿直したりしていた。ある未明、暴動がおきたのではないかと思われるほ

どの喧騒にとび起きて見ると、トラックが十数台乗りつけて、浮浪者を一斉に検束しているのだ。それまでも狩りこみと称する、収容さわぎは何回があつたが、その朝は常にくものものしい、徹底排除の觀があつた。泣き叫び座りこむ女子供を（なぜか男たちは黙々と無抵抗であつた）容赦なく殴りつけ蹴りとばしてトラックに追い上げる。瞬間にそれが行なわれたのは、衆人の目をさけたのである。“民主警察”的タテマエなど、どこ吹く風の暴虐ぶりを目撃して、魂が凍るのを私はおぼえた。

まさしくチリ芥のごとく、人々は地下道を追われた。そして最も無惨な光景はその後に現出したのである。放水がはじまつた。再び人々が戻れないよう、地下道は水びたしにされたのだ！ それから連日の放水だった。黒々と灯をうつす水びたしの地下道、収容所から脱走してきた人々は、呆然とうばわれたねぐらを眺めて立ちつくしていた。何という残酷なことをするのだ。これが人間の人間にに対する仕打ちかと、肚の底から胸ぶるいする怒りが噴き上ってきた。

冬、きたりなば……

……統計によれば、引揚者・復員軍人六百五十万多名余、そのうち八割まで職に就けず、焦土を彷徨するうちに、浮浪・無籍の人外はじき出されていく人々が少なくなかつた。

この年十一月二十八日、東京都は学生を動員して、浮浪者実態調査を施行した。引揚学生

同盟もこれに協力して、とりわけ上野周辺の

“資料”を収集したのである。一九四六年度

狩りこみ（これを救護とお役所は称する）、都下一万七千余名、その半数以上約一万名が

上野駅地下道、公園山内、ガード下の住人で

あつた。ただしこれはのべの数字であつて、

當時一万人がたむろをしている、というわけ

ではない。十一月二十八日の調査では、堀立

小屋・防空壕などに住む人々、夜の女とその

ヒモたち、そして職業的犯罪者の大半はヤサ

持ち（家を構えている）、ドヤ持ち（旅館を

根城としている）なのでこれを含まず、完全

宿無し一千三百二十六名（男八百九十六、女四百三十）であった。「冬きたりなば、この

数字はおそらく倍以上となり、昨年と同様の

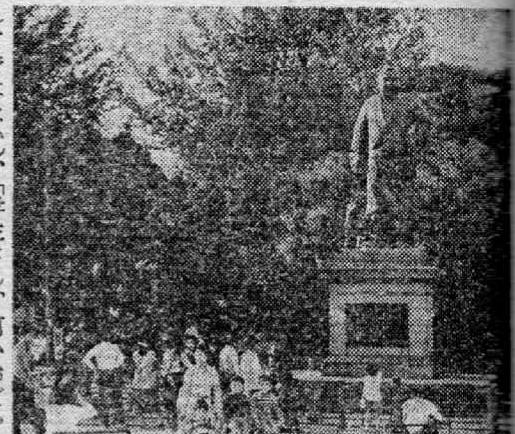
現象を呈するであろう。しかし地下道が閉鎖されて、ねぐらなき今年はいつたいどうなることであろうか?」

と、私はレポートに書いた。台東区役所と上野警察署は、"救援"を百万べんくり返しても、蝋集してくる人々に手を焼いて、放水という名案を(ノ)、思いついたのにちがいない。しかし、人間もまたゴキブリのよう執拗に生きようとする。家なき人々は駅正面玄関下の荷物受渡所付近に、あるいは商店の軒下等に移動してねぐらを求めた。夏の間は受渡所の一メートル半ほど突き出した庇が、いわば特等席であつたが、そこに仮寝をした人々の中に、はみ出してコンクリートの床に落ちた運の悪い男がいて(もちろん即死)、ここも追われてしまつた。弱肉強食は乱世のならい、腕力のあるものが一角を占領して、チギ(十円)チギチヨウ(十五円)という場所代をとるのである。夜具代りの新聞紙も一円、五十銭の相場がついて、無差別平等であった浮浪者の世界に、婆娘同様の木枯しそ吹く。冬、きたりなばである。寒さと餓えが同時にやつてくる、酷寒の二月には夜つびて寝

もやらず、ふるえながら駅周辺を徘徊する人々の姿が見られた。それは、しだいに数をふやしていくつて、ついに三千人をこえ、毎日二人、三人と凍死者(そしておそらくは栄養失調でもあつたろう)が出るという、すさまじいありさまとなつたのである。ここでも、"ぬくもり屋"という、十円で焚火にあたらせる商売がはばをきかせていました。

道路交通法違反で検束された。一晩で釈放されたが、それが私の留置場初体験だった。仲間からはキチガイあつかいされ、性コリもなくまたぞろ駅前に立ち、じつさい私は気が触れていたと思う。家なき人々に反応のないことに焦立ち、おのれ自身がその生活に体を投じなくてはならぬのだと、ヴ・ナロードを実践したのだから。

最初の友人はオカマ、男娼であった。エンツ・オシゲという、上野公園には三シゲと称する有名人のオカマがいて、背が高いのがエンツ、美貌の舞踊家出身のタップ、海苔巻きを売つて歩いている和服姿のノリマキ。タップのオシゲとは、結婚(?)を申しこまられるほどに親交を深めたのだが、それはまたおはなしにしよう。エンツ・オシゲは



上野の山のシンボル

エントツ・オシゲ、この人の侠気によつて私は、それまで闇の世界であった窮民街に、いともあつさりと迎え入れられた。彼とその妻子が定宿にしていた、山谷の「だるま屋」なるドヤに三疊一間を提供され、一宿一飯はおろか、七十日あまりもタダメシを食わせてもらつたのである。代償は十歳になる息子に読み書き、算数を教えることと、男娼仲間のさまざまな相談に応じて、用達し使い走りをしてではない、「学生さん、何かおこつてあげるシ」と声をかけてきたのだ。可愛想に頭がよすぎて気が変になつちやつたのだ、と彼は認識をしてくれた。したがつて、男娼であることをまったく隠さず（隠しても一目でわかる骨っぽい人であつたが）、つくり声やシナもぬきで、三十五歳という自称の年令もなほど相応と見えた。京都生まれという、おさない時からヘンタイだったという、性的知識に欠けるところのあつた私は、彼が女房子供持ちであるということに、ただただびく

り仰天した。

エントツ・オシゲ、この人の侠気によつて

ますます異端に

しばらく、上野駅界隈を徘徊しよう——。

戦後左翼は地下道住人をルンパン・プロレタリアートと規定して、たとえば次のように述べている。

「上野の地下道へ降りて見るがよい、そこに

は浮浪者・浮浪児・ヤミの女・コジキ・盗人・それらが併立し坐臥し、寝そべつてゐる。

彼らは正常な生活意識を失い、反社会性と破廉恥を売物にして、安易・放縫かつ巧つかくわしい人はご存知と思うが、彼らの組織は

愚連隊の介入を許さない。筋の通つたやくさくわしい人はご存知と思うが、彼らの組織は（原文ママ）生活手段を以て生活しているのである」

（も早、人間の矜持や、階級意識や、倫理は止揚されて詐偽・窃盜・かっぽらい・たかり等に、なつて生甲斐を感じてゐるのである。しかも收入は抜群であり、闇の女の比ではないのだ。オカマについては別の章でくわしく述べることにする。ともあれ、私は（傍点竹中）。

非文化的な浮浪者を処理し云々、これら浮浪者層をプロレタリアートに引上げることは可能か？（蓋し、ルン・プロの身上に、プロレタリアートを見ることはできないのであ

ることができたのである。

る。ブハーリンはこの層が決して未來の世界を持たぬこと、「独立した創造的事業には全く無能力の人々」（「共産主義のABC」）と規定している。

これは改造の一九四八年三月号、私たちの前に述べた調査をもとに書いて書かれた、宮出秀夫「ルンパン・プロレタリアートの問題／上野地下道の人々」の一節である。浮浪者を人間の残滓、社会的塵埃と呼ぶその慘心は、あの地下道に放水した警察・区役所の感覚とえらぶところがない。

戦後左翼にとってルンパン・プロレタリアートは浮浪者は、「処理すべき対象」でしかなかつた。

ブハーリンが何をぬかしたと、べらぼうめ手前つち日本人じやねえのかってんだよ、革命たア弱いものいじめのことかい、世の中の一番のどん底で苦しんでいる同胞に陽の目をみせること、カクメイじやなかつたのかよ。私はますます異端であった。そしてそのような疑問をマルクス・レーニン大明神に対して抱くことが、正直にいつてしまえば、まだよつぱりおそろしくもあつた。

だがしかし、現実は

人間は二合五勺で生きられるか？ それが問題であった。政府が配給する食糧だけで、何として生命を維持できるか、前号で述べた通りの配給事情だった。一人の裁判官の死は國家と法にしたがつたものの末路を、如実に証明してみせたのである。家なき人々は狩りこまれても、狩りこまれても地下道に戻ってくる。なぜか？ 収容所にいたのでは餓えて死ぬからだ。地下道にいれば食えるからだ。死ぬからだ。

人々に勤労意欲がないだつて、安易に生きているだつて？ したり顔で馬鹿をいうな！ 彼らは必死に労働をして、日々の糧をかせぎ出していた。盗みは職業ではないのか、貰うこと、捨うこともまた、とうぜんみずからのお肉を売り、あるいは売るまねをしてだますなかつた。

泥棒のはなしは、これも出し惜しみをする

こと、勞働ではないのか？

ようだが、別に章をもうけることにしたい。

浮浪者の第一歩は捨いからはじまる。まれに露店の手つだいをしたり、モサこけて（腹をへらして）いなければ進駐軍人夫に出たり、

というケースもあるが、食いつめたあげくに

上野界隈リノガミに流れてきた人々は、まずモトデいらすの捨いから、口を糊する手段を見つけていく、トンボリ（ないかないか）、

あるいは地見屋と呼ばれる職業は、戦前から存在した。前者は競馬場で落ちている馬券を探す。たまには当りクジを間ちがつて捨ててしまう客がいる。捨てるカミあれば捨うカミあり、ないかなかいかの道頓堀よ。地見屋とは

盛り場に落ちている小銭を捨う商売である。戦前からこの道三十年という私の知りあつたジイサンは、一日に固く五百円は捨得すると豪語しておつた。この商売には仁義があり、縄張りもきちんとある。捨うのは小銭だけにかぎり、もし財布などが落ちていたら交番にちやんと届けるのである。それで桜の代紋の

お目こぼしをいただくつて寸法だ。

トンボリは戦後、競馬場から姿を消した。

三角籠、スピード籠、復興籠の売り場に転向

したのである。ゴールデン・バット（金鷲とまだいっていた）十本、三十円也で売れる。

三枚捨うことができれば、一日のシャリ代になるのだ。ちなみに、進駐軍の人夫の日給が

當時七十円也。トンボリでいくらかの資金ができると、景品買いに出世する。カタン糸が十円で買って十五円却し、手ぬぐい二十円が田舎に持つていけば五十円になる。米と交換すれば行つて来いで、さらに利潤は大きい。

かくて一丁前の間ブローカーになる。青カン

（野宿）からドヤ住いに、浅草妙法院横丁古着市に小店の一軒も構えると、これはもう立志伝中の人である。

手当り次第に何でも拾つちやう、つまりはバタ屋、これはまつとうな商売であり、かつ大変な重労働である。ただし他人様の家の玄関に出張して、靴などを拾つちやう（ゲソ荒らしとこれを称する）てえと、最早立派な泥棒である。吸いガラをまき直して売るモク拾い、これは浅草本願寺のくだりで説明したよう分業化して、拾い専門、仲買人、巻き直し、却し、小売りと、その幾つかを兼ね、万の単位で貯金したという美談まで、当時の新聞に載っている。ルン・プロと蔑視される人々は、かくのごとく労働している、決して「独立した創造的事業に無能」ではないのである。私にはしだいに、この世界の仕組みが

見えてきたのだ。どうしてこの勤勉な人々を“処理”しなくてはならぬのか！むしろ、彼らをしてあるがままになさしめよ、不運に餓えて死に凍えて死ぬ人々にせめて義侠の手をさしのべよ、と。

“左翼”への絶望

落ちた物を拾うことは、たしかに浅間しいナリワイに相違ない。いま一つ身を屈すれば貰い屋である。はつきりいえば乞食だ。近郊近在の農家をまわって、ニギリメシやフカシイモ、あるいは一握の米の喜捨にあずかる。これには型通りの台詞がある。「戦災ヨジキ（復員・引揚等々境遇に応じて）です、すいません」というのが標準型。それが浮浪児になると、「ハラ減つたア何か食わしてよ」。集団ですごむのがいる。「生きるか死ぬかの瀬戸ぎわだ。ほつきや野荒しになるぜ」と脅迫して歩くのだが、そういう手合はまれである。乞食はすれども盗みはせず、貰い屋を職業とする人々の性格は、おおむね穎やかで金銭に執着しない。もらいためたニギリメシ三個二十円、フカシイモ五切十円で仲間に売

る、だがオケラの連中には気前よくタダで分けてやるのである。そんな情景をいくども私は見た。お相伴にもあづかった、そこには“出合いの仁義”があり、奈落に生きる人間同士のあたたかい相互扶助があった。人外と差別された、ルンペーン・プロレタリアートたち、いうならば敗戦非人の世界に、もつとも美しい人情を私は見出した。社会的塵埃と彼らを呼ぶ“左翼”、党派の論理に、ようやく私は絶望していくのである。一九四七年秋～冬。ほとんど学園に顔を出さず、学生同盟の仲間たちとも次第に疎遠になっていった。山谷と浅草、上野の間を、往復する日々がつづき、とうぜん二度目の留年というなりゆきであった。四八年の正月はともあれ田舎に帰つて、オヤジ様に近況の報告などを吐つたが、あくる四九年の夏まで陋巷に文字通り陥没してしまった。一年有半、行方不明となつた息子を、親どもは警察に捜索願いを出しても、さがし歩くでもなく、「どこかで生きているさ」とほうつて置いたのだから、まことに呑気なものであつた。さて、家なき人々は、拾い、貰いといった無害な生き方をも

つぱらしているわけではない。暴力を用い悪デエを働かして、仲間を攻撃している奴もいれば、裏街道をゆくいわゆるヤバイ仕事を専門にしている連中もある。

ブーバイ（闇切符売り）、クーバイ（空席売り・すなわち行列の場所を売りつけ）、

これはパクられると有無をいわざず六ヶ月の体刑、そのかわり日取千円をこすボロ儲けができたのである。当時、上野駅の乗降人員は

日に四十万人、遠距離の切符はなかなか手に入らなかつたのだ。ブーバイ・クーバイは、

バテた服装ではつとまらない（すぐには検挙をされてしまう）、上野の住人の中では紳士の部類に属するのである。他の駅とちがつて、

ノガミでは、暴力団が闇切符売りを支配するということはなかつた。本間さんと呼ばれる中年の復員軍人、カンちゃんと称する兄イ、

新聞売りの元締めをかねているアネゴ、といったボスたちがいて、浮浪者を“兵隊”に使つて、彼らを見つける不文律があり、暴力ザタなどほとんどない。

……なぐる蹴る、ときに刃傷三昧の喧嘩が

見られるのは、むしろ上野公園の山内とか御徒町のガード下。つまり夜の天使がたむろするあたりで、一晩に二つや三つのケンカ、カツアゲ（恐喝）、流しのタタキ（強盗）といふ事件がおこらぬことはなかつた。目の前で人が斬られたのを見たのは、エントツ・オシゲの知己を得た一九四七年の極月、敗戦三度目のクリスマスをむかえて、ジングル・ベルが広告塔からながれていた宵の口、一杯四十円也の中華そばを、私は屋台ですすつていた。そこへ、いきなり顔面血だらけの男が倒れこんできただ。ギョッとして見ると、右の耳がべるんと落ちかかって、それを手でおさえている指の間から、ドクドクと鮮血が噴き出している。ウワーッと食いかけの丼を持つて、私は横つとびに屋台の表へ逃げた。すると出合いがしらに、ギラギラ光る短刀をふりまわし、二人の若い衆が横丁からあらわれた。立ちすくんでいる私を、のんびりとラン

みたのか男の姿はすでに、店の夫婦の亭主のほうも消えていた。「カクセイサン、オマワリカキテモ、ヨケイナコトサベッタラタメヨ」と女房がいつた。そして、私の丼をひつたくると（中味はもうすっかりこぼれていた）、新しいそばをつくってくれたのだ。私は真青な顔をしていたにちがいない、だが平然としたふうをよそおつて、そばを啜つたことだつた。それが、妻夫婦との出会いだ。耳を斬られた男は日本名柳川武夫、梁という朝鮮人のやくざであつた。

妻夫婦の世話で、私はヤキトリ屋台を営業することになるのだが、それは半年ほど先。まずは五尺そこそことしない亭主と、まさに丼鉢を二つならべたように怪大なオツパイをした、威風堂々たる女房とのノミの夫婦と、親交をむすぶこととはなつた。在日朝鮮人の諸問題を、私はこの夫婦から実地に学んだ。おまけに梁やくざ氏の手びきで、暗黒街への道もひらけたのである。敗戦三文オペラその第二回、上野篇。そろそろ所定の枚数完了、次なるは闇の女とオカマの世界、山谷篇へと難走をつかまつります。